

はじめに——戦後が剥げかかってきた

この本では、だいぶ思い切ったことを書いています。

数年前、アイルランドのタラの丘という聖地を訪れたことがあります。

その丘の中央に立つと、三六〇度、全方位的に草原が続いています。全方位的な眺望がえられるのです。この本では、日本の戦後について、それがどこからはじまり、どういふ問題をはらみ、この戦後という空間から脱するのにどうすることが必要なのかについて、全方位的に考え抜き、論じています。

戦後について、タラの丘からの眺望のようなものを作ろうと考えました。

こういう本は、これまでなかったのではないか。

という意味は、こういう本を、誰も書こうとしなかったのではないか。

そんな思いで、『戦後入門』という題名を、真っ先に考えつき、それに値するものを書

こうと、たくさんの本を読み、考え、それを新書に値する速度で読めるものにした結果が、この限界まで厚い一冊の書物となりました。

なぜ全方位か。

理由は簡単。

敗戦後七〇年目を迎え、「戦後」が剥げかかっています。

ここまで自分の住む国がとんでもない状態になったことは記憶にない。まるで自分の国ではないようです。

なぜこうなったか。そういう思いが視野を思いきり広くとることを促しました。その結果、ほとんど現政権にとってだけでなく、現在の思想の枠組みにとっても破壊的な提言が行われています。コトバで作られた爆弾です。でも、さて、現実的でないかどうか。そこはどうぞ、読んで判断してみてください。

*

私は、もうこれまでのような、またいまも散見される、つまみぐいのような「戦後」についての語り方はやめたほうがよいと思っています。「日米同盟」を動かしえない前提と考える「現実論」も、現実に立つというのであれば、その基盤が失われ、耐用期限を過ぎつつあることを直視すべきだろうと思っています。

昨年、大学を離れるまで、九年のあいだ、大学で外国からの留学生と日本の学生を相手

に英語で日本の戦後について授業を行いました。そして、戦後というものが、どこの国にもある現象、問題であることを知りました。何が日本の戦後の特異さなのか、また普遍性なのか。なぜ日本の戦後を学ぶ必要があるのか。そんなことを考えさせられ、鍛えられました。

また、大学をやめる前後には一年間、米国の主要紙（「インターナショナル・ニューヨークタイムズ」）で固定コラムニストの仕事について、生き馬の目を抜くような米国の言論界の突端で、日本の現況の問題をめぐり、外国の読者に向かって書く経験もしてみました。

何が彼らにわかっていないことなのか。そして何が私たちにわかっていないことなのか。先の戦争でこてんぱんに負けた日本は、面白い。私は、この国には世界に平和構築を呼びかける大きな可能性が秘められていると思っています。そのことを、面白がろう。そしてその可能性の大きな穴を、のぞき込んでみよう。そう思い、相手のいやがることを書き、同時に自分の知らないことも、教えられました。

*

英語の授業で、数年前、こんな話をしました。

少し前のことです。昔世界史の授業で習った「バビロン捕囚」（BC五九七年）というも

のが、たった五九一年間で終わっていることを知って、ショックを受けました。紀元前六世紀に新バビロニア王のネブカドネザル二世がユダ王国を征服し、数千人にのぼる有力者をバビロンその他の地に連行し虜囚とします。その後その数は、数万人に増えます。捕囚の時期は当初の樂觀論を裏切り、世代を超えて、長期にわたってつづきます。そしてその間、ユダヤ人虜囚の間にバビロニア化ともいべきものが起こるので。

生まれてくる子の名前がバビロニアふうに変わり、月名にはじまり、文字自体もバビロニアふうに変質していく。文字を記す石板、家の建て方も変わる。そうしたなか、虜囚たちは、預言者に指導され、自分たちの宗教について徹底的に考え、崩壊した神殿に代わり、律法の言葉を重んじるという新しい信仰のあり方を作りだすようになります。そして、やがてペルシャが起こり、バビロニアを倒し、ユダヤ人たちは解放される。そういう話が、旧約聖書のエゼキエル書に出てきます。そしてこのできごとが、初の世界宗教を誕生させることになった契機として、歴史に名をとどめているのです。

聞いていて、——世界宗教のところを除くと——どこか戦後の日本を思わせる話だと思いませんか。明日の朝、大学にくる途中、電車にぶらさがっている広告の言葉に、英語と日本語とどちらが多いか、またカタカナの日本語と日本古来の日本語とアルファベットと、どんな比率になっているか、調べてご覧なさい。

そう宿題を出しました。

日本ももうだいぶバビロニアふうになびいてしまっています。何しろ日本の「バビロン捕囚」は、それよりも一〇年以上も長く続いているのですから。

戦争に敗れてから七〇年もたって、なお戦後七〇年ということが問題になるのは、その「戦後」が終わっていないからです。誰にも否定できないその明らかな証拠が、いま、沖繩の米軍基地を主権者である私たちが、自分たちの意向通りに動かせない事実として、私たちの前に差しだされています。

米国とのあいだの従属的な関係からいまだ脱することができず、そのことの裏返しのような象として、現在もなお、東アジアのうちのいくつかの国、特に中国、韓国と堅実な信頼関係を打ち立てることができない。そればかりか、みっともないヘイトスピーチなどが、盛んです。

こういう末期的な状態は、いつまで続くのでしょうか。そして終わるとしたら、それはどのようなのでしょうか。もし終わらないとすれば、三〇年後、私たちはなおも、戦後一〇〇年、といっているのでしょうか。